

初めての旅、刺激的な体験

岡山学芸館高校の4人

岡山学芸館高校(岡山市東区)の生徒4人が3月上旬、ミャンマーへ出かけた。みんな将来は医療関係の仕事を目指。初めてのミャンマーで医療施設を見学したり観光地を回ったり。刺激的な5日間の旅だった。

野口碧希君、石城戸瑠菜さん、大森彩音さん、藤井祐天さんの4人。いずれも旅行の時は1年で、今は2年生。森健太郎校長が引率し、校長と親しい協会の岡田茂理事長が案内役を買って出た。

まずヤンゴン郊外の下野クリニクへ。ここは協会が会員に呼びかけて各地に作った寄付クリニクの第1号。患者や出産も多く、地域医療に大きな役割を果たしている。



水中バゴダを観光。通訳から説明を聞く4人(前列)とヤンゴン郊外

同じ世代と交流

見学した医療施設は計5か所。自閉症のケアセンターでは、子供たちと折り紙をしながら遊んだ。

岡山で以前、細胞診の研修をした女医の娘さんとその友人と一緒に寝釈迦像で知られる古都バゴの見学後、仏教聖地ゴールデンロックに1泊した。彼女たちも高校生。同世代同士の交流もできた。

大森さんは旅の感想文にこう書いた。

「医療機関の周りでも街中でもごみが絶えません。岡田先生がおっしゃっていた『この国はごみがなくなれば発展は自分たちできれいにできると話していた。』」

深い関わり実感

藤井さんは、建国の父と呼ばれるアウンサン将軍の執務室や日本人墓地を見学したことに触れ「ミャンマーと日本の深い関わりを実際に感じる事ができた」と感想。また、「自閉症の子供たちを預かる施設では一緒に折り紙をした子に『teacher』と呼ばれた。笑顔に向けてくれて、折り紙を喜んでくれて、本当にうれしかった」と綴っている。

講演 手術 検診 岡山大中心に 医療支援活動

協会の呼びかけで1月初め、岡山大学を中心に大勢の医師らがミャンマーを訪れ、医療支援活動をした。

ミャンマー医学研究協会には岡山大から5人が参加。宮石智教授が専門の法医学について、荒木元朗講師(泌尿器科)が腎移植をテーマに講演。シンポジウムでは大塚愛(医学部長(解剖学)と竹居孝二(教授(生化学)、万代康弘(医療教育統合開発センター)副所長が日本の医療教育と岡山大の試みについて発表した。

岡山大教授ら 検診方法指導 乳がんセミナー

2月16、17両日、ヤンゴン中央婦人科病院で乳がん検診セミナーがあり、岡山大学病院乳腺・内分泌外科の土井原博義教授、水島協同病院(倉敷)の石部洋一医師、放射線科技師の逸見典子さん、医療コンサルタント会社メディアヴァ(東京)のスタッフら9人が参加。各地から出席した医師や技師に検診方法の講義や技術指導をした。

協会の支援でヤンゴンとマンダレーに乳がん検診センターができたのをきっかけに、ミャンマー政府も検診体制づくりに乗り出しており、人材育成が急務となっており、人材育成が急務となっており、5月には3人が岡山大で研修を受ける。

協会だより

遠心機を寄付

医療機器メーカーの久保田商事(東京)から協会に、血液を分離する免疫血液学用遠心機が贈られた。協会は1月にヤンゴンで開かれた輸血関連セミナーで展示後、国立血液センターに寄付した。

2期生始業式に行つてきました

希望に胸ふくらませた生徒たちの瞳が輝いている様子を見てきました。3月12日の始業式には1期生も全員が駆けつけてくれました。皆様のお陰を持ちました。大勢の補助助産師が育ちつつあります。この感激をどのようにお伝えしたらよいのか。本当に皆様のお陰です。今後ともご支援の程よろしく願います。

(理事 西山央子)

機器の扱い、学んでももらいました

岡山大学病院
臨床工学技士

林 久美子



1月まで3ヶ月間、ミャンマーからひとりの研修生を受け入れました。国立医学研究局技術職員カインウインさん。彼の研修の目的



機器を操作するカインウインさん=岡山大学病院

は、日本の臨床工学技士(E)が医師、看護師以外のメディカルスタッフとしてどのような働きをしているかを学ぶことでした。

去年1月にミャンマー医学研究総会のシンポジウムで、日本の臨床工学技士について話をさせていただいたのがきっかけでした。もちろんミャンマーには臨床工学技士という資格はなく、世界でもこのような国家資格があるのは日本だけ。来日前にどのような資格を持っているのか、どのような仕事をしているのかなどを調べました。研修は高度救命救急センター集中治療室(EICU)を中心に、医療機器管理センター、血液浄化センターで

も行いました。指導には同僚の平山隆浩さんも一緒に加わりました。最も危惧していたのは会話で、ともに英語は母国語ではない。それでもお互い何とかならうという気持ちで通じました。次に心配だったのは、ミャンマーではどの程度、医療機器について学んでいるのか、その理解度がわからなかったことです。多くの機器は初めて見るものばかり。その操作、清掃、点検などは問題がなかったのですが、医療に関することを学んでいないのには難渋しました。幸いなことにミャンマーから2名人の医師も岡山大学病院で研修中だったので、

その医師からミャンマー語で伝えて、インターネットも利用しました。京都や姫路城に出かけ、食事にも行きました。1月に雪が降り、生れて初めて見る雪に寒さも忘れていたようで、触れたり写真を撮っていました。よほど嬉しかったのでしよう。研修最後の日、印象的だったのはEICUを去る時に出口で深々とお辞儀をしていたことです。日本人でもそんな姿は見かけることは少なくなりましたが、彼にはよほど感慨深いものがあったようです。日本での研修が一つの財産となり、ミャンマーの医療を支える礎になることを祈ります。

岡山大の形成外科、脳外科、麻酔科、整形外科、看護科のスタッフと、他に笠井裕一(三重大学教授(協会理事)の呼びかけに応じた佐賀、岐阜、三重大の整形外科を含む計21人。ヤンゴン、マンダレー、モン州の3か所で4日間、現地医師に手術指導した。

岡山大学病院口腔外科の水川展吉講師と吉岡洋祐医師はモン州で口腔がん検診に当たった。検診した34人はいずれも嘔みたばこの習慣があり、そのうち2人が

編集後記

3人に寄稿してもらいました。半世紀が訪れ、その日にミャンマーを訪問中だった岡田理事長。年初に訪れて医学教育界の主だった顔ぶれに会ってきた木股理事。2人の文章から新生ミャンマーの息吹が伝わってきます▼もう1人は岡山大学病院臨床工学技士の林さん。協会が招いた初の技術職員を指導した報告です。これまでミャンマーからの研修生は大半が医師でしたが、今後は看護師、薬剤師、介護士などの医療スタッフも広がります。その多様な研修ぶりも紹介します。(西崎)